別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	学部の設置	
フリガナ 設置者	ガッコウホウジン　タイショウダイガク 学校法人　大正大学	
フリガナ 大学の名称	タイショウダイガク 大正大学　(Taisho University)	
大学本部の位置	東京都豊島区西巣鴨3-20-1	
大学の目的	教育基本法及び学校教育法に従い、仏教精神により人間を総合的に理解し、人類の福祉に貢献する人材を養成することを目的とする。	
新設学部等の目的	人間環境学科 人と環境のインターフェイスで生じる諸課題に対応することができる環境人材や社会起業家、こども成育支援・子育て応援・こどもビジネス、国際協力等の実践的な知識や技術、さらには倫理を兼ね備えたプロフェッショナルを養成する。 教育人間学科 実践的な教育学、教育心理学と哲学、宗教学を融合し、「ひとづくり」としての教育を考えると共に、相互の信頼と共生を支える基盤として、他者の歴史・文化・宗教・風俗習慣等を理解・尊重し、他者と積極的にコミュニケーションをとることのできる能力を涵養する教育研究を行い、その成果を社会で活かせる人材を養成する。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	年	人	年次 人	人		年　月 第　年次	
人間学部 [Faculty of Human Studies]							東京都豊島区西巣鴨3-20-1
人間環境学科 [Department of Human Life and Environment Studies]	4	60		240	学士 （人間環境学）	平成23年4月 第1年次	
教育人間学科 [Department of Education and Human Studies]	4	65	3年次 3	266	学士 （教育人間学）	平成23年4月 第1年次 第3年次	
計		125	3	506			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	・平成23年4月　大学院収容定員変更予定（平成22年6月29日届出）

教育課程

新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
	講義	演習	実験・実習	計	
人間学部　人間環境学科	87科目	24科目	0科目	111科目	124単位
人間学部　教育人間学科	129科目	11科目	6科目	146科目	124単位

教員組織

	学部等の名称	専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等
新設分	人間学部　人間環境学科	6 人 (6)	1 人 (1)	0 人 (0)	1 人 (1)	8 人 (8)	0 人 (0)	49 人 (49)
新設分	教育人間学科	3 (3)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	7 (7)	1 (1)	53 (53)
新設分	計	9 (9)	3 (3)	2 (2)	1 (1)	15 (15)	1 (1)	64 (64)
既	仏教学部　仏教学科	14 (14)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	23 (23)	1 (1)	103 (103)
既	人間学部　アーバン福祉学科	4 (4)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	1 (1)	57 (57)
既	臨床心理学科	7 (7)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	1 (1)	58 (58)

の概要									
設分	人間科学科	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	1 (1)	62 (62)	
	文学部　人文学科	13 (13)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	14 (14)	1 (1)	57 (57)	
	歴史学科	11 (11)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	16 (16)	1 (1)	68 (68)	
	表現学部　表現文化学科	8 (8)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	70 (70)	
	計	66 (66)	24 (24)	8 (8)	1 (1)	99 (64)	6 (6)	193 (193)	
合計		76 (76)	27 (27)	10 (10)	2 (2)	115 (115)	7 (7)	253 (253)	

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計	
	事務職員	人 67 (67)	人 62 (62)	人 129 (129)	
	技術職員	2 (2)	0 (0)	2 (2)	
	図書館専門職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	その他の職員	1 (1)	0 (0)	1 (1)	
	計	69 (69)	62 (62)	132 (132)	

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	校舎敷地	40,104㎡	0㎡	0㎡	40,104㎡	【貸与者】 (学)佛教教育学園
	運動場用地	31,429㎡	0㎡	0㎡	31,429㎡	
	小計	71,533㎡	0㎡	0㎡	71,533㎡	【貸与期間】
	その他	287㎡	0㎡	0㎡	287㎡	H5.1.26から20年間
	合計	71,820㎡	0㎡	0㎡	71,820㎡	

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	49,221㎡ (49,221㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	49,221㎡ (49,221㎡)	

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	61室	30室	10室	5室 (補助職員　2人)	0室 (補助職員　0人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
	人間学部　人間環境学科	9　室	
	人間学部　教育人間学科	7　室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	人間環境学科	31,608〔4,637〕 (27,240〔3,889〕)	40〔3〕 (20〔3〕)	20〔2〕 (20〔2〕)	22,440 (20,520)	0 ( )	0 ( )	電子ジャーナル、視聴覚資料は、大学全体で共用
	教育人間学科	15,518〔1,211〕 (12,646〔943〕)	333〔24〕 (153〔12〕)	20〔2〕 (20〔2〕)	22,440 (20,520)	0 ( )	0 ( )	
	計	47,126〔5,848〕 (39,886〔4,832〕)	373〔27〕 (173〔15〕)	20〔2〕 (20〔2〕)	22,440 (20,520)	0 ( )	0 ( )	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	4,862㎡	383	502,778	

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	
	1,312㎡	総合グラウンド、野球場、テニスコート	

経費の見積及び維持の概要	経費の見積り	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
		教員１人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	400千円	－	－	大学全体
		共同研究費等		11,469千円	11,000千円	11,000千円	11,000千円	－	－	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用費）を含む。
		図書購入費	94,500千円	94,500千円	94,500千円	94,500千円	94,500千円	－	－	
		設備購入費	150,000千円	7,579千円	7,579千円	7,579千円	7,579千円	－	－	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	1,080千円	900千円	900千円	900千円	－　千円	－　千円

学生納付金以外の維持方法の概要	私立大学等経常費補助金、寄付金（設立宗派・同窓会・寺院関係者）、手数料（入学検定料等）、資産運用収入　等

既設大学等の状況

大学の名称　大正大学

学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
仏教学部								東京都豊島区西巣鴨3－20－1	
仏教学科	4	100	25	450	学士（仏教学）	1.16	平成22年度		
人間学部									
アーバン福祉学科	4	140		560	学士（社会福祉学）	1.09			
ソーシャルワーク専攻		(80)		(320)		1.15	平成22年度		
環境コミュニティ専攻		(60)		(240)		1.02	平成22年度		
臨床心理学科	4	85	5	350	学士（臨床心理学）	1.29	平成21年度		
人間科学科	4	170	6	692	学士（人間科学）	1.20			
人間科学専攻		(105)	(3)	(426)		1.27	平成20年度		
教育人間学専攻		(65)	(3)	(266)		1.13	平成20年度		
文学部									
人文学科	4	100	3	406	学士（人文学）	1.15	平成15年度		
歴史学科	4	135	3	546	学士（歴史学）	1.24	平成15年度		
表現学部									
表現文化学科	4	130	3	526	学士（表現文化）	1.22	平成22年度		
仏教学研究科								東京都豊島区西巣鴨3－20－1	
仏教学専攻									
修士課程	2	40		80	修士（仏教学）	0.60	平成13年度		
博士後期課程	3	7		21	博士（仏教学）	1.33	平成13年度		
人間学研究科									
社会福祉学専攻									
修士課程	2	7		14	修士（人間学）	0.26	平成13年度		社会福祉学専攻
臨床心理学専攻									人間科学専攻
修士課程	2	18		36	修士（人間学）	0.97	平成13年度		平成23年4月
人間科学専攻									収容定員変更
修士課程	2	5		10	修士（人間学）	0.07	平成13年度		学則変更届出
福祉・臨床心理学専攻									（平成22年6月22日）
博士後期課程	3	6		18	博士（人間学）	0.39	平成13年度		
文学研究科									
宗教学専攻									
修士課程	2	10		20	修士（文学）	0.45	昭和27年度		
博士後期課程	3	3		9	博士（文学）	0.66	昭和32年度		
史学専攻									
修士課程	2	10		20	修士（文学）	0.80	昭和54年度		
博士後期課程	3	3		9	博士（文学）	0.44	昭和54年度		
国文学専攻									国文学専攻
修士課程	2	5		10	修士（文学）	0.25	昭和27年度		比較文化専攻
博士後期課程	3	3		9	博士（文学）	0.22	昭和32年度		平成23年4月
比較文化専攻									収容定員変更
修士課程	2	15		30	修士（文学）	0.05	平成9年度		学則変更届出
博士後期課程	3	3		9	博士（文学）	0.11	平成11年度		（平成22年6月22日）

附属施設の概要

名　称　：　カウンセリング研究所
目　的　：　本学の設立理念である仏教精神の体現を基盤として、カウンセリングの理論・技法及びその実践に関する教育と研究を行う
所在地　：　東京都豊島区西巣鴨三丁目20番1号
設置年月：　昭和38年4月
規模等　：　面積192.69㎡（教室棟の一部）

名　称　：　綜合仏教研究所
目　的　：　本学の設立理念である仏教精神の体現を基盤として、仏教とその文化に関する研究、及び有為な研究者の育成
所在地　：　東京都豊島区西巣鴨三丁目20番1号
設置年月：　昭和32年4月
規模等　：　面積223.15㎡（教室棟の一部）

教　育　課　程　等　の　概　要

（人間学部　人間環境学科）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考
第Ⅰ類科目	大学入門	大学入門１－I	1前	1			○								兼1
		大学入門１－II	1前		1		○								兼1
		大学入門２	1前	2			○								兼2
		大学入門３	1前	2			○				1				兼7
		大学入門４	1前	2			○						1		兼7
		小計（5科目）	－	7	1	0	－			0	1	0	1	0	兼13
	人間探究	人間探究Ａ－I	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ａ－II	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｂ－I	1・2前・後		2		○			1					兼2
		人間探究Ｂ－II	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｃ－I	1・2前・後		2		○								兼1
		人間探究Ｃ－II	1・2前・後		2		○								兼1
		人間探究Ｄ－I	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ｄ－II	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｅ－I	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｅ－II	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｆ－I	1・2前・後		2		○								兼1
		人間探究Ｆ－II	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ｇ－I	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｇ－II	1・2前・後		2		○								兼5
		人間探究Ｈ－I	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｈ－II	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｉ	1・2後		2		○								兼1
		小計（17科目）	－	0	34	0	－			1	0	0	0	0	兼34
	諸外国語	英語I	1・2前・後		1		○								兼11
		英語II	1・2前・後		1		○								兼11
		英語III	1・2前・後		1		○								兼12
		英語IV	1・2前・後		1		○								兼12
		英語V	2・3前		1		○								兼1
		英語VI	2・3後		1		○								兼1
		中国語I	1・2前・後		1		○								兼6
		中国語II	1・2前・後		1		○								兼6
		中国語III	1・2前・後		1		○								兼5
		中国語IV	1・2前・後		1		○								兼5
		中国語V	1・2前		1		○								兼2
		中国語VI	1・2後		1		○								兼2
		ドイツ語I	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語II	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語III	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語IV	1・2前・後		1		○								兼3
		フランス語I	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語II	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語III	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語IV	1・2前・後		1		○								兼2
		韓国語I	1・2前		1		○								兼1
		韓国語II	1・2後		1		○								兼1
		韓国語III	1・2前		1		○								兼1
		韓国語IV	1・2後		1		○								兼1
		スペイン語I	1・2前		1		○								兼1
		スペイン語II	1・2後		1		○								兼1
		スペイン語III	1・2前		1		○								兼1

			スペイン語IV	1・2後		1		○								兼1	
			ヒンディ語I	1・2前		1		○								兼1	
			ヒンディ語II	1・2後		1		○								兼1	
			ヒンディ語III	1・2前		1		○								兼1	
			ヒンディ語IV	1・2後		1		○								兼1	
			小計（32科目）	－	0	32	0	－		0	0	0	0	0	兼32		
第Ⅱ類科目	基礎部門		基礎ゼミナールⅠ	1前		2			○	1			1				
			基礎ゼミナールⅡ	1後		2			○	1			1				
			人間環境論	1前	2			○		6	1		1				
			現代社会と環境・こども	2前	2			○		1							
			仏教環境論	2後	2			○		1							
			こども学基礎論Ⅰ	1後		2		○							兼1		
			環境福祉論	1後		2		○		1					兼1		
			小計（7科目）	－	6	8	0	－		6	1	0	1	0	兼2		
	専門部門	A群	こども学基礎論Ⅱ	2前		2		○		1							
			こども学基礎論Ⅲ	2前		2		○							兼1		
			現代こども研究A	2後		2		○							兼1		
			現代こども研究B	2後		2		○		1							
			現代こども研究C	2前		2		○							兼1		
			現代こども研究D	2前		2		○		1							集中
			現代こども研究E	3前		2		○							兼1		
			現代こども研究F	3前		2		○		1							
			現代こども研究G	3後		2		○							兼1		
			現代こども研究H	3後		2		○							兼1		
			小計（10科目）	－	0	20	0	－		2	0	0	0	0	兼6		
		B群	環境基礎論A	1前		2		○			1						
			環境基礎論B	1後		2		○			1						
			環境基礎論C	1後		2		○		1							
			環境基礎論D	1前		2		○		1							
			環境研究A	2前		2		○			1						
			環境研究B	2後		2		○		1							
			環境研究C	2前		2		○		1							
			環境研究D	2後		2		○		1							
			環境応用論A	3前		2		○							兼1		
			環境応用論B	3後		2		○							兼1		
			環境応用論C	3・4前		2		○							兼1		
			環境応用論D	3・4後		2		○							兼1		
			環境実践論A	2後		2		○							兼1		
			環境実践論B	3前		2		○							兼1		
			小計（14科目）	－	0	28	0	－		3	1	0	0	0	兼4		
		C群	人間環境研究A	2後		2		○							兼1		
			人間環境研究B	2前		2		○							兼1		
			人間環境研究C	2後		2		○							兼1		
			人間環境研究D	2前・後		2		○							兼1		
			小計（4科目）	－	0	8	0	－		0	0	0	0	0	兼4		
	実践部門	A群	ワークショップⅠ（こども）	1前		6			○	3							
			ワークショップⅡ（こども）	1後		6			○	3							
			ワークショップⅢ（こども）	2前		6			○	2							
			ワークショップⅣ（こども）	2後		6			○	2							
			ワークショップⅤ（こども）	3前		6			○	3							
			ワークショップⅥ（こども）	3後		6			○	3							
			ワークショップⅦ（こども）	4前		6			○	3							
			ワークショップⅧ（こども）	4後		6			○	3							
			フィールドワークⅠ（こども）	2前		2			○	3							
			フィールドワークⅡ（こども）	2後		2			○	3							
			小計（10科目）	－	0	52	0	－		3	0	0	0	0			
			ワークショップⅠ（環境）	1前		6			○	3	1						
			ワークショップⅡ（環境）	1後		6			○	3	1						

		B群	ワークショップⅢ（環境）	2前		6			○		3	1						
			ワークショップⅣ（環境）	2後		6			○		3	1						
			ワークショップⅤ（環境）	3前		6			○		3	1						
			ワークショップⅥ（環境）	3後		6			○		3	1						
			ワークショップⅦ（環境）	4前		6			○		3	1						
			ワークショップⅧ（環境）	4後		6			○		3	1						
			フィールドワークⅠ（環境）	1前		2			○		3	1				兼1	集中
			フィールドワークⅡ（環境）	2前		2			○			1					集中
			小計（10科目）	－	0	52	0	－			4	1	0	0	0	兼1	
			卒業論文	4		8			○		4	1					
			卒業研究	4		8			○		4	1					
			小計（2科目）	－	0	16	0	－			4	1	0	0	0		
合計（111科目）				－	13	251	0	－			6	1	0	1	0	兼49	

学位又は称号	学士（人間環境学）	学位又は学科の分野	社会学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
第Ⅰ類科目26単位、第2類科目98単位、合計124単位以上修得すること。ただし、50単位までは、他学科から充当することができる。 （履修科目の登録の上限：46単位（1,2年次）、50単位（3年次）、60単位（4年次）【年間】）	1学年の学期区分	2学期
	1学期の授業期間	15週
	1授業の授業時間	90分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人間学部　教育人間学科）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考
第Ⅰ類科目	大学入門	大学入門１－I	1前	1			○								兼1
		大学入門１－II	1前		1		○								兼1
		大学入門２	1前	2			○			1					兼1
		大学入門３	1前	2			○			1	1				兼6
		大学入門４	1前	2			○				1	1			兼6
		小計（5科目）	－	7	1	0	－			2	1	1	0	0	兼10
	人間探究	人間探究Ａ－I	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ａ－II	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｂ－I	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｂ－II	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｃ－I	1・2前・後		2		○				1				
		人間探究Ｃ－II	1・2前・後		2		○				1				
		人間探究Ｄ－I	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ｄ－II	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｅ－I	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｅ－II	1・2前・後		2		○								兼4
		人間探究Ｆ－I	1・2前・後		2		○								兼1
		人間探究Ｆ－II	1・2前・後		2		○								兼2
		人間探究Ｇ－I	1・2前・後		2		○								兼3
		人間探究Ｇ－II	1・2前・後		2		○								兼5
		人間探究Ｈ－I	1・2前・後		2		○			1					兼3
		人間探究Ｈ－II	1・2前・後		2		○			1					兼3
		人間探究Ｉ	1・2後		2		○								兼1
		小計（17科目）	－	0	34	0	－			1	1	0	0	0	兼33
	諸外国語	英語I	1・2前・後		1		○								兼11
		英語II	1・2前・後		1		○								兼11
		英語III	1・2前・後		1		○								兼12
		英語IV	1・2前・後		1		○								兼12
		英語V	2・3前		1		○								兼1
		英語VI	2・3後		1		○								兼1
		中国語I	1・2前・後		1		○								兼6
		中国語II	1・2前・後		1		○								兼6
		中国語III	1・2前・後		1		○								兼5
		中国語IV	1・2前・後		1		○								兼5
		中国語V	1・2前		1		○								兼2
		中国語VI	1・2後		1		○								兼2
		ドイツ語I	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語II	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語III	1・2前・後		1		○								兼3
		ドイツ語IV	1・2前・後		1		○								兼3
		フランス語I	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語II	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語III	1・2前・後		1		○								兼2
		フランス語IV	1・2前・後		1		○								兼2
		韓国語I	1・2前		1		○								兼1
		韓国語II	1・2後		1		○								兼1
		韓国語III	1・2前		1		○								兼1
		韓国語IV	1・2後		1		○								兼1
		スペイン語I	1・2前		1		○								兼1
		スペイン語II	1・2後		1		○								兼1
		スペイン語III	1・2前		1		○								兼1

			スペイン語IV	1・2後		1		○								兼1	
			ヒンディ語I	1・2前		1		○								兼1	
			ヒンディ語II	1・2後		1		○								兼1	
			ヒンディ語III	1・2前		1		○								兼1	
			ヒンディ語IV	1・2後		1		○								兼1	
			小計（32科目）	－	0	32	0	－		0	0	0	0	0	兼32		
第Ⅱ類科目	導入部門		基礎ゼミナールⅠ	1前	2				○		2	1	1				
			基礎ゼミナールⅡ	1後	2				○		2	1	1			兼1	
			教育キャリアゼミナールⅠ	2前	2				○		2		1				
			教育キャリアゼミナールⅡ	2後	2				○		2		1				
			社会学の基礎	1前		4		○								兼1	
			教育心理学の基礎	1前		2		○					1				
			社会心理学の基礎	2前		2		○					1				
			哲学の基礎	1前		2		○				1					
			宗教学の基礎	1前		2		○								兼1	
			教育学の基礎	1前・後	4			○					1				
			現在の教育問題	1後		2		○			1						
			教育の現場を知るⅠ	1前		1				○			1				
			教育の現場を知るⅡ	1後		1				○			1				
			小計（13科目）	－	12	16	0	－			2	2	2	0	0	兼3	
	発展部門	A群	教育者のための哲学	1・2後		2		○				1					
			教育者のための倫理学	2・3前		2		○				1					
			いのちの倫理	1・2後		2		○				1					
			人と文化をつくる宗教	2・3前		2		○				1					
			生活のなかの宗教	1・2後		2		○				1					
			文化からみる日本史	2・3前		2		○				1					
			文化からみる世界史	1・2後		2		○				1					
			科学とオカルトの歴史	1・2後		2		○				1					
			東と西の思想史	1・2後		2		○								兼1	
			美学の歴史	1・2後		2		○								兼1	
			小計（10科目）	－	0	20	0	－			0	2	0	0	0	兼2	
		B群	パーソナリティの心理学	1後		2		○					1				
			臨床発達心理学	2・3前		2		○					1				
			こころの教育を考える	2・3前		2		○			1						
			いのちの教育を考える	2・3前		2		○				1					
			マナーと人間関係を考える	2・3後		2		○								兼1	
			現代社会の倫理を考える	2・3前		2		○			1						
			環境への責任を考える	2・3前		2		○								兼1	
			伝統民俗を活かす教育	2・3前		2		○								兼1	
			伝統礼法と教育	2・3前		2		○								兼1	
			対立と対話	2・3前		2		○								兼1	
			宗教と教育の関係	2・3後		2		○								兼1	
			小計（11科目）	－	0	22	0	－			1	1	1	0	0	兼6	
		C群	現代教職論	1・2前・後		2		○			1						
			教育本質論	2・3前・後		2		○			1						
			発達・学習論	2・3前・後		2		○					1				
			教育制度論	2・3前・後		2		○			1						
			教育と社会	2・3後		2		○								兼1	
			教育課程論	2・3前・後		2		○			1						
			社会科教育法Ⅰ	2・3前		2		○								兼1	
			社会科教育法Ⅱ	2・3後		2		○								兼1	
			社会・地歴科教育法Ⅰ	2・3前		2		○								兼1	
			社会・地歴科教育法Ⅱ	2・3後		2		○								兼1	
			社会・公民科教育法Ⅰ	2・3前		2		○								兼1	
			社会・公民科教育法Ⅱ	2・3後		2		○								兼1	
			宗教科教育法Ⅰ	2・3前		2		○				1					
			宗教科教育法Ⅱ	2・3後		2		○				1					
			国際理解教育論	2・3前		2		○								兼1	
			道徳教育研究	2・3前・後		2		○								兼1	

		特別活動研究	2・3前・後		2		○								兼1	
		教育方法論	2・3前・後		2		○					1				
		生徒・指導指導論	2・3前・後		2		○								兼1	
		教育相談	2・3前・後		2		○								兼1	
		教育・現場体験	2・3前・後		1				○	1						
		小計（21科目）	－	0	41	0	－			2	1	1	0	0	兼8	
	D群	生涯学習概論	1～4前・後		4		○								兼2	
		比較生涯学習概論Ａ	1～4前		2		○								兼1	
		比較生涯学習概論Ｂ	1～4後		2		○								兼1	
		子育て支援学習	2～4前		2		○								兼1	
		青少年と学習	2～4後		2		○								兼1	
		成人と学習	2～4後		2		○								兼1	
		教育と宗教	2～4後		2		○								兼1	
		社会教育計画論	2～4後		4		○								兼2	
		教育文化事業論	2～4集中		2		○								兼1	
		図書館情報学Ａ	2～4前		2		○								兼1	
		生涯スポーツ論	2～4前		2		○								兼1	
		生涯学習施設実習	2～4通		4		○								兼2	
		スポーツ実習Ａ	1～4集中		1				○						兼1	
		スポーツ実習Ｂ	1～4集中		1				○						兼1	
		スポーツ実習Ｃ	1～4集中		1				○						兼1	
		小計（15科目）	－	0	33	0	－			0	0	0	0	0	兼8	
	専門ゼミナール部門	教育人間学専門ゼミナールⅠ	3前	2				○		3	2	2				
		教育人間学専門ゼミナールⅡ	3後	2				○		3	2	2				
		教育人間学専門ゼミナールⅢ	4前	2				○		3	2	2				
		教育人間学専門ゼミナールⅣ	4後	2				○		3	2	2				
		教育人間学特別研究	3・4前・後		2			○		3	2	2				
		小計（5科目）	－	8	2	16	－			3	2	2				
	教職関連部門	日本史概説Ａ	2・3後		2		○								兼1	
		日本史概説Ｂ	2・3前		2		○								兼1	
		西洋史概説	2・3前・後		4		○								兼1	
		東洋史概説	2・3前・後		4		○								兼2	
		人文地理学Ａ	2・3前		2		○								兼1	
		人文地理学Ｂ	2・3後		2		○								兼1	
		自然地理学Ａ	2・3前		2		○								兼1	
		自然地理学Ｂ	2・3後		2		○								兼1	
		地誌学	2・3前・後		2		○								兼1	
		法律学概論（国際法を含む）	2・3前		2		○								兼1	
		政治学概論（国際政治を含む）	2・3後		2		○			1						
		経済学概論（国際経済を含む）	2・3後		2		○								兼1	
		現代宗教論	2・3前		2		○								兼1	
		宗教史Ⅰ	2・3後		2		○								兼1	
		宗教史Ⅱ	2・3後		2		○								兼1	
		小計（15科目）	－	0	34	0	－			1	0	0	0	0	兼13	
		卒業論文	4		8			○		3	2	2				
		卒業研究	4		8			○		3	2	2				
		小計（2科目）	－	0	16	0	－			3	2	2	0	0		
合計（146科目）			－	27	251	16	－			3	2	2	0	0	兼53	

学位又は称号	学士（教育人間学）	学位又は学科の分野	社会学関係・教育学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
第Ⅰ類科目26単位、第2類科目98単位、合計124単位以上修得すること。ただし、50単位までは、他学科から充当することができる。 （履修科目の登録の上限：46単位（1,2年次）、50単位（3年次）、60単位（4年次）【年間】）	1学年の学期区分	2学期
	1学期の授業期間	15週
	1授業の授業時間	90分

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（人間学部人間環境学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類科目	基礎部門	基礎ゼミナールⅠ	環境コミュニティの学習を展開するに求められる「学習力」の基本的習得を目指す。 社会状況からの学びを中心に「情報収集力」「読解力」「分析力」「発想力」「展開力」等について学ぶ。分析→レポートの作成→プレゼンテーションといった学びの方法と展開、知への基礎技術と知識、視点の構築と向上を図る。 さらには、環境コミュニティの学びをすすめるに都市（アーバン）・地方（ローカル）・海外（グローバル）そしてグローカルな基礎学習視点の形成をめざす。	
		基礎ゼミナールⅡ	本授業では基礎論Ⅰで学んだ知識および技術を土台として、学習を進めるにあたり必要な文章の読解、レポートの作成、プレゼンテーションに関する能力をさらに向上させることを目的とする。具体的には、コミュニティやこどもの施策・環境・活動への理解と関心を高める文献収集と読解を通じて、文章内容を正確に把握する力の一層の向上とレポート作成ならびにプレゼンテーションのための技術の向上を図る。	
		人間環境論	都市における環境を主眼に「コミュニティとこども」を核とした様々な社会問題や事象を扱う。なぜなら21世紀の激動社会を生き抜くための問題解決能力を獲得する上で、それらが極めて重要である。そこで、「環境コミュニティ」という新しいコンセプトの基礎となる様々な学問領域もしくは学問分野を取り上げ、それぞれの領域・分野について解説するとともに、それらと他との関係について、「環境・こども論」というコアのキーワードとのネットワークがあることを学ぶこととする。	
		現代社会と環境・こども	これからの社会生活の安定のためにどのような社会システムを構築すべきなのか。特にコミュニティでの生活状況、こどもの生活圏等その環境を捉えていく生活者はどのような視点をもち社会に発信していくべきなのか考える。 現代社会においてコミュニティ及びこどもの環境を考察する意義、理念等について、国際的動向を踏まえ講じる。また、今日わが国において、コミュニティとこどもの環境に対して、どのような生活課題（ニーズ）・問題が存在し、それらを解決するための関連資源にはどのようなものがあるかについて述べる。さらに、それら生活課題・問題を創出する現代社会の構造的問題にも言及する。	
		仏教環境論	本学の理念を踏まえて、近代から現代に至るわが国の環境コミュニティ、さらにはこども環境に影響を与えた仏教思想の流れを整理しながら、現代仏教の視点から環境を中心とした社会的実践の展開とその可能性についての検証を試みる。さらには、市民社会の形成に関わる仏教環境社会論の構築と今日的課題について考察する。	
		こども学基礎論Ⅰ	こども学の入門を目的とした講義。子どもについて心身面の成長と発達の理解を基本にした内容とする。年代層としては18歳未満の子ども全てについて対象とするが、主には乳幼児から小学校低学年までの年齢を中心とする。加えて、心身面の発育だけではなく広く遊び・文化・生活など多面的に理解できるようにも配慮したい。	
		環境福祉論	少子高齢社会への対応は今日のわが国における社会福祉政策の最大の課題である。さらに、経済危機によって雇用不安も発生し、生活不安は増大している。私たちの暮らしはベースが揺らいでいるのである。環境問題への対応も待ったなしであり、国際社会においてわが国の環境問題において果たす役割は重要であり、途上国からの期待も大きい。私たちは持続可能な社会を作るために何をすべきなのだろうか。福祉と環境という2つの面から新しい社会システムのあり方を探求する。	

第Ⅱ類科目	専門部門	A群	こども学基礎論Ⅱ	児童虐待やマルトリートメントなど、不安定な環境のなかにいるこどもたちの状況についての基本的な理解を目的とする。加えて、こどもたちやその家庭の生活上の困難を緩和・解決するための福祉施策や活動の実態と課題について意見交換することを通して、社会問題や社会的制度に関して問題意識を持ち、自ら考える力を養う。	
			こども学基礎論Ⅲ	人間はどのような発達をするのだろうか。この講義は、受胎してから主に学童期までのこどもの発達について、主に個体としての発達、人間関係の発達、発達障害について論じる。	
			現代こども研究A	子育て応援関連授業。世の中における活動を「公的」なもの「私的」なもの等に整理をし、そのなかで市民である私たちが担うことがあるのかないのか、あるとすれば何かについて考える。市民活動を実際に行っていく際に必要な知識、技術等について、「子育て支援活動」を例に学ぶ。	
			現代こども研究B	あそび創造関連授業。こどもにとっては「遊ぶ」ことが大切だといわれてきた。だが、実際は大人が評価できる世界（教育）に圧倒的重点が置かれ、こどもが自ら育とうとする（遊育）世界は、ないがしろにされてきた。いのちに根を張り、生涯の礎となる「遊育」とは何かを知り、それを通して、遊びの現場に立つ大人自らの立ち位置を探る手がかりとなる授業を行う。	
			現代こども研究C	こどもビジネス関連授業。こどもとその家庭を対象とした商業活動の全体像を理解することを目的とする。こどもと家庭に関する産業は、アパレル、化粧品、絵本・雑誌、遊び場、住宅、保育サービス、遊具他、多岐に広がっている。こうした産業界でのこども関係の取り組みの鳥瞰図を理解するとともに、こども関係産業の課題や将来展望についても合わせて理解を深める機会としたい。	
			現代こども研究D	こどもインターナショナル関連授業。講義やディスカッション、アクティビティ、こども参加現場からの実践報告を通じて、こども参加の重要性や、こども参加を支えるこどもファシリテーターについて理解する。また、実際にこども向けワークショップにおいて、こどもファシリテーターを体験する。これらの理論と実践から、こどもの権利に基づき、こどもに寄り添い、こどもの声や力を引き出す、こどもファシリテーターの在り方について学ぶ。	
			現代こども研究E	子育て応援関連授業。保育士の基本的な役割や保育（養護と教育）実践の理念・制度・方法について学習することを目的とする。保育に関心が高い学生や、保育現場に就職を希望する学生の研究や実践的な支柱としての位置付けとする。	
			現代こども研究F	あそび創造関連授業。児童福祉施設や児童館、学童クラブ、地域子育て支援センターなどに関心が高い学生や、就職を希望する学生たちへの研究や実践の原理を伝える講義である。こどものケアの理念・原理についての理解を目的とすると共に、実際のケア場面での支援に関し事例研究を通して深めることも行う。	
			現代こども研究G	こどもビジネス関連授業。マンガの世界の広がりと深さ、歴史、制作工程、そして楽しさを理解するとともに、こどもにとってのマンガの意味や児童文化財としてのマンガの位置や役割などについて学習を深めることを目的としたい。	

第Ⅱ類科目	専門部門	A群	現代こども研究H	こどもインターナショナル関連授業。国際貢献の全体像、つまり国連や政府機関によるものと、非政府機関によるものとの違いや役割分担、そして事業内容についての基本的理解の機会とすると共に、国際貢献の理念・方向性と課題についても合わせて学習させたい。授業の中では、とりわけこどもとその家庭を対象とした国際貢献に焦点を当てることを意識することとしたい。	
		B群	環境基礎論A	様々な環境問題の中から、国境を越えて展開している、いわゆる地球環境問題、すなわち「酸性雨」「オゾン層破壊」「地球温暖化」「海洋汚染」「途上国の公害」「有害廃棄物の越境移動」「熱帯林の減少」「野生生物の減少」「砂漠の拡大」を取り上げ、それぞれの問題がどのように発生してきたか、現象がどう拡大してきたか、そして問題の現状や解決への課題等について、概要を解説する。	
			環境基礎論B	環境をめぐる問題やその改善に向けた取り組みの中から、国際社会での取り組み、日本の環境問題、環境法・環境政策の展開といった個別の問題を扱い、それぞれの環境問題がどのように発生してきたか、現象がどう拡大してきたか、そしてそれらへの取組がどのように開始され、展開してきたか、現状や根源的な解決への課題はなにか、等について概要を解説する。	
			環境基礎論C	企業の環境対策、社会的責任（ＣＳＲ）、環境ビジネスについて基礎を学ぶ。 「食」「住」「コミュニティ」と環境について現状と課題を学び、生活者として認識を深める。	
			環境基礎論D	地球の歴史や人類の歴史、進化論や産業革命について学びながら、我々にとって切実な地球環境問題の由って来るところを理解する。生活に身近な企業という存在の成り立ちや、企業が環境問題に対してどのような考え方をし、どのような取り組みを行っているかを学ぶ。企業と環境問題の歴史的変遷や、実際の企業経営と、そこで働く社員の活動についても理解を深める。	
			環境研究A	この講義では、いわゆる「環境教育」の基礎的な知識や課題の所在を把握することを目的として、概説を展開する。環境を保全し、持続可能な社会を形成するために、教育や公衆の意識啓発がどうあるべきか、またそれらをどのようにそれを進めて行くべきかについて、環境教育に即して学ぶ。具体的には、環境教育が誕生した背景、環境教育として取り組まれてきた活動の内容、持続可能な開発の概念と環境教育の関係、日本・欧米・アジアでの環境教育の取り組みについて学ぶ。	
			環境研究B	21世紀に社会における企業の果たすべき役割や社会的責任について、具体的事例を交えながら学ぶ。 企業と社会の関係、特にステークホルダーとのコミュニケーションのあり方や消費者との関係、産業別にどのように環境問題に取り組んでいるか、社会が企業を見る目や評価の仕方がどう変わってきたかなど、これからの時代に求められる企業の社会貢献や社会的責任について広く学ぶ。	
			環境研究C	21世紀に入り、急激な社会動向、国際・国内状況等の変化にともない、環境コミュニティ、さらには地域生活課題も多岐にわたり複雑化している。 特に、日常の生活と深い関係のある地域コミュニティを中心とした、市民の生活状況（生活力）・安全と安心状況（環境力）、福祉構成状況（福祉力）等の現状をみつめることは、今後の学習への基本的視点形成になる。この授業では、環境コミュニティを縦軸（時間的認識）と横軸（空間的認識）から検証し、問題構造への認識と対応課題を見いだしながら、まちづくりとコミュニティへの新たな理論と実践戦略を考察する。	

第Ⅱ類科目	専門部門	B群	環境研究D	高度経済成長に伴う産業化、地域開発によって、我々の生活は豊かになった。反面、自然破壊や大気汚染、水質汚濁など環境問題が浮上した。また、都市への人口や富の集中により、地域による生活格差なども起きている。このような状況に対し、住民は生活サイドからどのように対抗してきたのか。被害者、加害者、様々な角度から環境と住民について考える。	
			環境応用論A	地球規模の環境問題をはじめ、都市・地域の居住・労働・生産・流通・交通の環境や、世界規模で進展している情報ネットワーク化社会の経済メカニズムの機能、そしてその機能が社会に及ぼす影響など、社会環境をめぐる諸問題を解決するための社会経済政策のあり方について理解を深める。	
			環境応用論B	環境法を見る視点を提供する。環境法とは「環境の質を社会的に望ましい状態にするための法システムの総称」。そのエッセンスは「環境負荷を発生する人間の意思決定に、いかに影響を与えて負荷の少ない方へと行動を向けるか」であり、誰をどう動かして何を達成しようとしているかを重視すべきなどと指摘し、環境法的な論点を示す。産廃の不法投棄を防止できないのはなぜか、低層住宅地に高層マンションが建つのはなぜかなど、身近な問題も考察する。	
			環境応用論C	自然との共生は人類の永遠の課題であるが、歴史を考える基礎として、人類はその発展の中で自然環境とどのように関わってきたかを考えていく。例えば、各種資源の利用など、人間は自然のシステムをどのように利用してきたか。あるいは、環境の変化による自然の驚異（自然災害等）などに、どのように臨んできたか（防災対策等）、自然環境研究の立場から考察してみる。	
			環境応用論D	国際開発において、環境問題は最も重要な要素の一つである。「開発か環境か」といった二分論を越えて、開発成果を測る指標そのものに、環境を据えることができるかどうか。日本が果たす役割に注意しつつ、アジアのコミュニティの現状を分析しその展望を探る。	
			環境実践論A	この講義は、社会調査に関する基礎的な知識の習得を通じて、社会調査の考え方や心構えなどを身につけることを目的とする。具体的には、社会調査の目的や歴史、質的調査・量的調査などの方法やその特徴などについて、実際の調査事例に基づいて概説する。加えて、社会調査における調査倫理の必要性についても、事例に即して説明をする。	
			環境実践論B	環境問題の流れを系統的に学び、環境問題の解決に向けて行政が果たすべき役割を理解し、政策の立案・遂行上必要とされる、環境問題解決のためのプロになるために習得すべき基礎知識や資質を学ぶ。具体的な環境政策事例として①廃棄物問題・循環型社会の形成②地球温暖化問題　③大気環境問題などを取り上げて、法律の立案から成立の過程、国際環境条約の交渉過程などについても考察する。	
		C群	人間環境研究A	コミュニティとは何かを考えつつ、NCCで身につけてもらいたいグループワークの力を養うことを目的とする。講義内容は、秋に展開される地域イベントの参観・報告、ネクストコミュニティに関する講義、「もし世界が100人の村だったら」ワークショップである。いずれの場面でも重要なことは、コミュニティを自らの問題として考え、考えたことを人に伝える姿勢である。	
			人間環境研究B	「ボランティアをしている」というと、いいことをしていると思われがち、または思いがちな面があるが、実際には「押し付け」と思われることや、誰のためにボランティアをしているのかわからない場合がある。この授業では、国際協力の現場における実際のボランティア経験を元に、ボランティアとは何かについて学び、今の自分に何ができるかを考える。ゲスト講師には、ボランティアを経験したのちにNGOのスタッフとなり活躍している人をお招きし、活動から得た「やりがい」「壁」「展望」などについて語っていただく。期末には、学生に国際問題を選んでもらい、それに対するボランティアを考えて発表してもらう。	

第Ⅱ類科目	専門部門	C群	人間環境研究C	戦後の日本社会では、都市化、産業化の進展に伴い、地域社会や地域生活での連帯性や共同性が失われたと言われている。本講義では、失われた連帯性を回復させ、新しい共同性をいかに形成していくかということが注目されるようになり、公的な施策に登場したコミュニティという概念を中心に、変化した社会背景とコミュニティ形成の基本原理、現代社会における地域コミュニティとしての住民自治組織の機能と再生の可能性について検討する。	
			人間環境研究D	現代社会において問題視されつつある他者とのコミュニケーション、社会とのコミュニケーションの技法を実践的に学ぶ。特に、グループワークに於いて、個々の個性の発揮と、グループのパフォーマンスの最大化を調和させる術を学び、社会力の向上をめざす。.	
	実践部門	A群	ワークショップⅠ（子ども）	授業目的は「こどもやこども関係の活動に興味・関心を持つ」である。 毎回テーマを決めて講義＋討議＋プレゼンテーションを繰り返す形態で、新たな知識の収集と、自ら考える力、他人に伝える力を養う。ワークショップⅠは前半と後半に分かれ、前半ではこども遊び創造を柱にしてこども遊び創造入門（レポートの書き方など基本的学習作法を含む）として、こどもにとっての遊びと、その支援の意味を理解する。後半はこども・子育て応援入門（レポートの書き方など基本的学習作法を含む）として、こども・子育て応援が焦点化される社会的背景の理解を促進する。	
			ワークショップⅡ（子ども）	授業目的は「こどもやこども関係の活動に興味・関心を持つ」である。 毎回テーマを決めて講義＋討議＋プレゼンテーションを繰り返す形態で、新たな知識の収集と、自ら考える力、他人に伝える力を養う。ワークショップⅡは前半と後半に分かれ、前半ではこどもビジネスを柱にして、こどもを対象とするビジネスの種類や意味を理解する。後半はこどもインターナショナルを柱に、こどもに関する国際的な施策や、活動の内容、目的を理解を促進する。	
			ワークショップⅢ（子ども）	授業目的は「体験を通して自分のこどもに貢献できる方法・内容を考える」である。 3回分の月曜日の授業（計9コマ）を1ユニットにして、4つのユニットごとでテーマ設定を行い学習を深める。1週目は知識・情報の収集、2週目は取材やグループ研究、3週目でプレゼンテーションと評価を行う。春学期はこどもインターナショナルを柱に、国際的なこどもの人権を考え、こどもの実態を考えるための手法＝Hi５を身に付けると共に、スピーキング・アウトの手法を使って、こどもとのワークショップを企画・運営する。 （＋フィールドワーク指導）	
			ワークショップⅣ（子ども）	授業目的は「体験を通して自分が子どもに貢献できる方法・内容を考える」である。 こどもの遊びを創造・発展させるために必要な知識・スキル習得（子ども表現・身体遊びと造形遊び）を行う。秋学期は3回分の月曜日の授業（計9コマ）を1ユニットにして4つのユニットごとでテーマ設定を行い学習を深める。1週目は知識・情報の収集、2週目は取材やグループ研究、3週目でプレゼンテーションと評価を行う。 （＋フィールドワーク指導）	
			ワークショップⅤ（子ども）	子育て応援、あそび創造、こどもビジネス、こどもインターナショナルについて「社会的な活動に参加して貢献のためのスキルを身につける」ことを授業目的とする。 春学期はテーマを設定し、そのテーマに関するディベートに取り組むことで、これまでの知識やスキルの理解を深めると共に、サービスラーニング・プログラムを活用することから、秋学期に向けたプログラム実践のための準備を行う。（＋フィールドワーク指導）	
			ワークショップⅥ（子ども）	子育て応援、あそび創造、こどもビジネス、こどもインターナショナルについて「社会的な活動に参加して貢献のためのスキルを身につける」ことを授業目的とする。 秋学期は春学期に準備したサービスラーニング・プログラムをブラッシュアップするとともに、プログラムの実践・評価を行うなかで学習を深める。（＋フィールドワーク指導）	

第Ⅱ類科目	実践部門	A群	ワークショップⅦ（子ども）	子育て応援、あそび創造、こどもビジネス、こどもインターナショナルについて「新たな社会貢献活動を提案・実行できる」ようになることを授業目的とする。 春・秋学期を通して、1年生のWSの支援をしながらも、基本的には各自のテーマに基づいて研究やフィールドワークの成果をまとめ、各領域での課題に対応した新たな事業の方向性について提案するレポートを、作成・発表するための支援を行う。	
			ワークショップⅧ（子ども）	子育て応援、あそび創造、こどもビジネス、こどもインターナショナルについて「新たな社会貢献活動を提案・実行できる」ようになることを授業目的とする。 春・秋学期を通して、2年生のWSの支援をしながらも、基本的には各自のテーマに基づいて研究やフィールドワークの成果をまとめ、各領域での課題に対応した新たな事業の方向性について提案するレポートを作成・発表するための支援を行う。	
			フィールドワークⅠ（子ども）	ワークショップⅢ（こどもビジネス）での授業に対応した各領域でのフィールドワークを通して、ワークショップの授業で得た知識を、現場実践により深めることを目的とする。とりわけフィールドワークⅠ・Ⅱでは、主に現場での実践を「観察」し理解することに力点を置く。	
			フィールドワークⅡ（子ども）	ワークショップⅣ（子育て応援）での授業に対応した各領域でのフィールドワークを通して、ワークショップの授業で得た知識を、現場実践により深めることを目的とする。とりわけフィールドワークⅠ・Ⅱでは、主に現場での実践を「観察」し理解することに力点を置く。	
		B群	ワークショップⅠ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続で講義・演習が展開される。 ワークショップは基本的には1週1つのテーマについて、1限＝話題提供・2限＝課題演習・3限＝報告講評といったグループによる学習が主流となる。したがって、受講者の学びへの主体的取り組みが強く求められる。	
			ワークショップⅡ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。 ワークショップⅡは、春学期からの学習を積み上げつつ、グループによる学習が主流となる。テーマの設定・課題など、一層高度な探求が求められる。したがって、春学期以上に受講者の学びへの主体的取り組みが強く求められる。	
			ワークショップⅢ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。 ワークショップⅢは、1年次ワークショップⅠ・Ⅱからの学習を積み上げつつ、グループによる学習が主流となる。テーマの設定・課題など、一層高度な探求が求められる。したがって、1年次以上に受講者の学びへの主体的取り組みが強く求められる。	
			ワークショップⅣ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。 ワークショップⅣは、ワークショップⅠ・Ⅱ・Ⅲからの学習を積み上げつつ、一層グループによる学習が主流となる。さらには、個々人の学習テーマの設定・課題など、一層高度な探求が求められる。したがって、今まで以上に受講者の学びへの主体的取り組みが強く求められる。	
			ワークショップⅤ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。ワークショップⅤからは、「コミュニティ創造分野」「コミュニティマネジメント分野」「環境コミュニケーション分野」の3分野を柱として学習展開をする基本的視点を学び形成する。	

第Ⅱ類科目	実践部門	B群	ワークショップⅥ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。ワークショップⅥでは、「コミュニティ創造分野」「コミュニティマネジメント分野」「環境コミュニケーション分野」の3分野での学習課題を発展させ「環境福祉」「まちづくり」「社会起業」「社会貢献」「環境教育」等々への学習と実践につなげていく。学習課題に応じては、フィールドワークやインターンシップ(自主学習も含む）と組み入れて課題の達成を図る。	
			ワークショップⅦ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。ワークショップⅦでは、ワークショップⅥまでの学習経験を踏まえ、履修者各自の課題を明確にし、上記までの概ね3分野5系での学習計画を策定し、個人あるいはグループでワークショップに位置づき学習をすすめていく。学習課題に応じては、フィールドワークやインターンシップ(自主学習も含む）と組み入れて課題の達成を図る。	
			ワークショップⅧ（環境）	本コースで実施されるワークショップ形式の3時限連続の講義・演習が展開される。ワークショップⅧでは、ワークショップⅠからⅦまでの学習経緯を踏まえ、履修者各自の課題と学習成果を整理する。個人あるいはグループでワークショップⅠからⅦまでの学習総括をすすめる。学習総括の状況に応じては、課題への達成度を高めるための補足学習・フィールドワーク等も組み入れて課題達成の「質」的向上をも図る。最終的には環境コミュニティに対する課題意識をもち、生活のよりよい方向をめざすコミュニティリーダーとしての諸力を修得する。	
			フィールドワークⅠ（環境）	このフィールドワークⅠは「環境コミュニティコース」の学生の履修登録科目である。「土と自然とまちづくり」の実際を「山形県・長井市レインボープラン」のフィールドに出向き、現地でご指導をいただきながら「レインボープラン」がめざす循環型社会への形成過程を学ばせていただく。「レインボープランの概要」等を調べ、「住民自治」と「参加」そして「まちづくり」の現状を学ぶ。それらの学びを5泊6日（9月上旬実施予定）のフィールドワークで展開する。	
			フィールドワークⅡ（環境）	講義及び実習を通じて、環境教育のひとつである「ネイチャーゲーム」について学び、またその指導法を習得する。	
			卒業論文	1～4年次を通じたワークショップⅠ～Ⅷにおいて、担当教員が指導する。 1年次からワークショップⅠを履修し、3年次に卒業論文のテーマ設定と作成のための資料収集、論文の章立てと各章の概略を明確にする。4年次においては、各人のテーマを深め、資料の収集・読み込み、章ごとの概略の作成等を通じて、卒業論文として具体化する作業をし、卒業論文を完成させる。	
			卒業研究	1～4年次を通じたワークショップⅠ～Ⅷにおいて、担当教員が指導する。 1年次からワークショップⅠを履修し、3年次においては、卒業研究の専門的課題のテーマ設定と関連する資料の収集の方法を学びながら、テーマの概略を明確にし、各自が問題意識をもって調査、考察する。4年次においては、各人の課題を深め、資料の収集・読み込み、調査、考察等を通じて、卒業研究として具体化する作業をし、研究や作品を完成させる。	

（注）

1　開設する授業科目の数に応じ，適宜枠の数を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（人間学部教育人間学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類科目	導入部門	基礎ゼミナールⅠ	教育人間学専攻では、「教育」を広く「ひとづくり」としてとらえる。この授業は、「ひとづくり」の3つの要素＝「人間を深く知る」＋「自分をのばす」＋「将来、ほかの人をのばす仕事にたずさわる」＝を結びつける基礎科目である。身近にある「ひとづくり」の現場を探したり、メディアなどにとりあげられた「ひとづくり」の実践例を知ったりすることにより、自分が「教育」に対してもっているイメージを広げ、「ひとづくり」の豊かな可能性を実感することを目指す。同時に、レポートを書くために必要なスキルを、順序よく身につける。	
		基礎ゼミナールⅡ	春学期の基礎ゼミで学んだことを土台とし、国際化とともに複雑化していく社会において、スムーズにコミュニケーションをとるために必要なマナー・プロトコールについて学ぶ。単なる知識だけではなく、実践できるようにする。最後に、まとめ上げた内容をグループで発表する。	
		教育キャリアゼミナールⅠ	「学力低下対策」「地域活性化とひとづくり」「キャリアとひとづくり」「学校マネジメント」など、学校教育の周辺にある様々な「ひとづくり」について、現場のゲスト講師から話を聞くことなどを含めて、広く知識を得て理解を深める。そうした問題のいくつかをテーマとして、グループワークを通じて解決法を探る。調査、討論、発表などの実践を通じて、問題解決型の学び方を習得する。	
		教育キャリアゼミナールⅡ	春学期のキャリアゼミで学んだことを土台とし、主としてグループに分かれて、特定のテーマについて調べ、まとめて、発表する。個人の関心に従って、テーマ内の問題点を明らかにし、グループ内の他のメンバーに説明をする。グループ内での問題意識の共有をはかり、解決のための情報収集、討論を行う。最後に、グループ内での討論をもとに、個人個人の関心に基づきレポートを作成する。	
		社会学の基礎	社会学とはどのような学問であるのかを学ぶために、身近な社会現象と日本が直面する社会問題を具体的に考察する。そこから社会学の課題を明らかにし、日本社会と社会学という学問に対する理解を深める。	
		教育心理学の基礎	人間は日常生活を送る中で様々な知的活動を行なっている。そうした知的活動に関する研究は、認知心理学の領域で行なわれている。本講義では、認知心理学の知見をもとに、人間の記憶や思考のプロセスを学ぶ。認知心理学の知見を教育や生活の実践場面に活かすためには、知的活動についてだけではなく、教育心理学の領域で蓄積されている、動機づけや具体的な教科に即した知見を知ることも必要である。そこで本講義では、認知心理学・教育心理学の理論を、トピックごとに学習するだけでなく、実生活の文脈に結びつけて学んでいく。	
		社会心理学の基礎	この授業では社会心理学の観点から、「対人認知」、「帰属過程」、「集団心理」、「言語とコミュニケーション」、「自己と他者」、「コミュニティと組織の学び」といった事柄をテーマに、複雑な人間関係の中での心の営みについて学ぶ。例えば、人は生活の中で、どう他人に対する良い悪い等の印象をつくっていくのか、人はなぜ集団の中で他人の意見に流されやすいのか、といったことについて、講義と演習を通して学んでいく。「社会の中での人の心」に関する科学的知見や理論を学ぶことで、自分や周囲の人間関係のあり方を振り返り、実生活に役立ててほしい。	

第Ⅱ類科目	導入部門		哲学の基礎	私たちの眼の前には謎が満ちている。悪いことをしてはなぜいけないのか、私が見ている木は本当にそこにあるのか、世界は何からできているのか、といったような問いをいきなり投げ掛けられると、私たちは普段このようなことをじっくり考えることが少ないためか、返答に窮する。そもそもどうして謎なのかと率直に思ってしまう。 本授業では、哲学入門として、こうした問題に立ち向かい、明瞭な謎を立ち上がらせることを目標とする。	
			宗教学の基礎	宗教についての誤解は多い。宗教嫌いという人も日本には少なくない。しかしグローバル化時代を生きていくのに際して、たとえばイスラームに関する知識がなければ、適切な生き方はできない。また日本人は「無宗教」を自認する人が多いが、では京都や奈良に群がる寺社参りの人びとについて、どのように考えたらいいのか。あるいは英国では宗教教育が義務教育の一教科とされている。アメリカ社会では宗教が政治や経済に深く影響を与えている。 以上のように、世界に目を向けながら、人間と宗教、世界と宗教の関係を考えてみたい。	
			教育学の基礎	我々は、生まれてから死ぬまで、意図のある、ないに関係なく、いつも、人に育てられ、人を育てる営みを行なっている。いわば、教育や学習とは、自分そのものである。しかし、人をどう育て、自分がどう育てばよいのかなどの教育や学習の問題は、常に社会において混乱にさらされている。我々は、どう人を育て、また、自らが育つべきなのだろう。また人を育て、自らが育つとはどういうことなのか。この授業では、まさに人を育て、育てられる「当事者」である皆さんと、教育と学習・発達にまつわる、様々な理論、現実の問題、実践的な取り組みについての知識を学び、一緒に議論していきたい。 授業内容は、大きく分けて、①我々の社会をつくっている代表的な教育・学習理論、②学校教育に関する制度、方法、理論、実践、③学校の外側の社会における教育と学び、の三つを軸に展開する。	
			現在の教育問題	学校・家庭・地域社会において行われている教育の諸活動をめぐっては、現在様々な問題が提起されている。この講義では、特に学校教育を中心に問題の所在を知り、それらの問題解決のためにどのような対応が必要か考察する。自らの経験を通して感じ取った問題や、収集した資料・データ等を持ち寄り、現在の教育問題を自ら探求しようとする姿勢を確立することを目的とする。	
			教育の現場を知るⅠ	近隣の学校や社会教育施設、学童保育の現場等に出向き、そこでの教育（授業）を参観したり、教育活動の補助（TA）など教職員の業務の一部に参加したりしながら教育現場の現実に肌で触れる。そこから教育現場の抱える諸問題を発見し、見聞を広げてもらうことを課題とする。茶髪、ピアス、男子の長髪、必要最低限を超える化粧等は厳禁。受講希望者には面接を行い、合格者のみ履修を認める。	
			教育の現場を知るⅡ	近隣の学校や社会教育施設、学童保育の現場等に出向き、そこでの教育（授業）を参観したり、教育活動の補助（TA）など教職員の業務の一部に参加したりしながら教育現場の現実に肌で触れる。そこから教育現場の抱える諸問題を発見し、見聞を広げてもらうことを課題とする。茶髪、ピアス、男子の長髪、必要最低限を超える化粧等は厳禁。受講希望者には面接を行い、合格者のみ履修を認める。	
	発展部門	A群	教育者のための哲学	「哲学の教育」「哲学的教育」「教育の哲学」という3側面から教育と哲学の関係を考える。「哲学の教育」としては、高校の「倫理」科目の基となる、西洋哲学史を中心とした哲学史の大きな流れを理解する。「哲学的教育」としては、科目に関係なく、哲学を教育理念や方法に生かす術を考える。「教育の哲学」としては、教育とは何かを哲学の観点から論じる。	

第Ⅱ類科目	発展部門	A群	教育者のための倫理学	教育における徳育の充実は、その必要が叫ばれながら、いざ実践となると多くの困難を伴うことも事実である。価値の相対性を認めながら、しかも善・悪・正義・幸福などについて押し付けにならないように指針を示さなければならないからである。本講の第一の目標は、西洋と東洋の倫理学および近・現代の日本教育史について基本的知識を身に付けることである。第二の目標は、それらの基礎知識を踏まえて、自発的な自己形成への意欲を高め、倫理と教育との内的連関について深く考察することである。そして第三に、以上の二点を通して、今後の教育における徳育の可能性を追求することを最終目標とする。	
			いのちの倫理	近年、生命倫理が脚光を浴びているのはなぜなのか、生命観・死生観は歴史的にどう変化したのかといった基礎を学ぶ。まず欧米で議論されるようになった生命倫理はキリスト教を初めとする西欧の価値観の影響が大きく、非西欧諸国での適用が問題となる場合がある。臓器移植や生殖医療、尊厳死などの倫理的問題への国や文化ごとの対応について考える。	
			人と文化をつくる宗教	キリスト教や仏教、イスラームなどの世界宗教が歴史的にどのように展開したかを具体的にみる。宗教がそれぞれの社会で果たしてきた役割についてみることにより、教義の面からだけでなく慣習や芸能文化の面から、人々の価値観、身体感覚、国民意識などにどのように影響を与えたかを学ぶ。さらに異なる宗教文化の歴史的交流、習合についても理解する。	
			生活のなかの宗教	日本人に見られる伝統的人間観、自然観、宗教観を、日常生活というフィールドのなかに探っていく。日本の風土に根ざした習俗、儀礼、神話伝説にはどのようなものがあるか。それらは生活においてどのような役割を持っていたかを理解する。沖縄などの国内の多様性にも目配りし、さらに近代化によって伝統文化と生活はどのように変化したかを知る。	
			文化からみる日本史	「日本文化」というと、「恥」「甘え」「タテ社会」最近では「かわいい」などといった言葉で表現されることが多い。この授業ではこういったいわゆる「日本文化論」はどこまで正しいのかを具体的な歴史的事例をみることを通して確かめたい。この作業を通して、日本人のアイデンティティについて考えつつ、日本史に対する多角的な視点を身につける。	
			文化からみる世界史	私たちの日常生活や社会生活は暦を抜きにしては成立し得なくなっている。この授業では、暦の成立・発展過程を、科学、政治、経済、宗教との関係に眼を向けつつ、歴史的に考察することを通じて、暦に対する諸々の素朴な疑問を解き明かしていく。自ら調べ、発表することを通して、改めて世界史の面白さと難しさを感じることであろう。	
			科学とオカルトの歴史	科学革命における経験主義の起源の一つとして、魔術的伝統が挙げられる。しかし魔術のような非合理な伝統が合理主義の追求である近代科学に影響を及ぼしたとは考えられないと主張する科学史家もいる。果たしてそう言えるのだろうか。この授業では、ルネサンス期において興隆をみた魔術的伝統とはどのようなものであったかを理解し、その中で、脱神秘化していく魔術と理論化される技術に焦点をあてながら、科学と魔術との関係について理解を深める。さらに、現代において科学と科学でないものの間の線をどこで引くかという問題についても検討する。	
			東と西の思想史	歴史も気質も違う地盤から発生、形成された諸思想を「比較」するということは、それ自体、無茶で無意味だという批判も故なしとしない。しかし、グローバル化の中で経済および政治の相互交流は加速度的に進行している。取り残されているのは、いかにも「頑固」な思想・宗教の領域ではないか。思想間の対話･交流はロゴス（理性）を頼りにして進める外はない。思想の「東と西」というのは「比較思想」という領域である。比較思想では、まず己れの拠って立つ基盤、自分の思想的立場の対象化の手続きが必要である。この講座では西洋哲学と仏教思想を「ロゴス」的に検討する。	

第Ⅱ類科目	発展部門	A群	美学の歴史	「美」を感じる力は人間形成にとって、とても大切である。昔から哲学のテーマは真・善・美・聖とされている。それぞれ論理学・倫理学・美学・宗教学に対応する。だが美醜の判断は、真偽や善悪の判断とは違う特徴を持っている。それは他の判断と違って、いつでもどこでも通じるような法則を取り出すことができないということである。逆に言えば、それだけ人間の憧れや価値観を正直に反映しているとも言える。つまり「美」を通して、人間が歴史の中で何を求めてきたかが分かるのである。「精神史」というのはこの意味である。芸術は科学・宗教・社会・産業とも密接に関係しているし、様々な文化の交流の証拠も示してくれる。この授業は具体的な表現を通して人間を知る旅である。この旅の中で、社会科・地歴科・公民科を教える際に役立つ知識やものの見方を身に付けることができる。	
		B群	パーソナリティの心理学	人は一人ひとり違った特徴を持っていることは誰しも知っていることである。心理学では、そうした一人ひとりの違いを「パーソナリティ」と呼ぶ。本授業では、まず講義を通してパーソナリティを捉える枠組みを学ぶ。そして、その枠組みに沿った測定と解釈について、体験しながら理解していく。講義と体験を通して、自分自身についても理解を深めるとともに、他者が自分と異なるという前提に立ち、相手を尊重することを学ぶ。	
			臨床発達心理学	近年、学習障害や自閉症スペクトラムなど、発達障害に関する話題がマスメディアなどで取り上げられ、一般に知られるようになってきた。しかし、これらの障害については、未だ誤解も多く、発達障害を持つ人が生活や学習において困難を持つことが少なくない。本授業では、発達障害について、その心理的特徴に関する研究知見を紹介するとともに、アセスメント学習や生活上の困難解決を目指す実践を紹介する。発達障害と関連する問題について理解するとともに、発達障害を持つ人の問題を自分自身の問題に結び付け、具体的な対応や解決策を考える。	
			こころの教育を考える	本講義ではまず「こころの教育」が注目された社会・時代の背景を学び、それに対する議論を知る。その上で『心のノート』や道徳の副読本などをテキストに、そこで追求される「こころ」「いのち」「自己」「社会」のイメージを検討していく。なぜ「こころの教育」が求められるのか、そしてそれは現代社会において妥当なものなのか自分の見解を持つことを目指したい。	
			いのちの教育を考える	近年、家族や近隣社会の中での殺人やいじめによる自殺などの事件が起こるたびに、いのちの教育の必要性が叫ばれている。生とは何か、死とは何か、いのちの大切さを教えるとはどういうことであり、何によってそれは可能か。様々な国内外の実践例やそれらが基づく理論を学ぶ。学校教育の現場のみならず、ホスピスなど医療現場での死生学の需要についても知る。	
			マナーと人間関係を考える	国際化とともに、価値観やライフスタイルが多様化・複雑化していく社会の中で、相手を思いやりスムーズにコミュニケーションをとるための「マナー」や、異なる文化同士が理解を深めコミュニケーションをとるための「プロトコール」について、知識として学ぶだけでなくロールプレイ等を行いながら実践的な習得を行なう。	
			現代社会の倫理を考える	共有すべき価値観がなく、かといって一人ひとりが自らを律するような価値観を持ちえない現代社会において（価値相対主義）、身近なトピックスから個人の自由とモラルについて考える。	
			環境への責任を考える	これまで各地の地域社会が担ってきた環境保全の役割が、近代化、グローバル化の中でどのように変化してきたか、という視点から環境問題への対応のあり方を考える。まず環境問題の歴史を振り返って検証を行い全体像を把握する。その上で、現在問題となっている具体的な「環境問題」について、それぞれの地域の事例を検討することで問題点を明らかにし、その解決への方法論について探る。	

第Ⅱ類科目	発展部門	B群	伝統民俗を活かす教育	産業の活性化を目的として行われる「地域おこし」はまた、教育機関との連携によってその地域の伝統民俗の継承・発展にもつながる複合的プロジェクトである。近年では、文化政策の一貫として国や自治体が地域の伝統民俗の学び直しや掘り起こしを支援する事業も各地で盛んに行われている。 授業では、民俗事象と教育実践との現代的関わりをいくつかの事例をみながら検討する。	
			伝統礼法と教育	日本の礼法は、お辞儀をするにしても、形よりも自分の心が相手の心と結びつくことを大切にする。手をどこにつくかということよりも、相手に対する敬愛の気持ちが大事なのである。そして合理的な動作が最も美しい動作とされている。合理的な動作とは、すべての無駄を省いた行動であり、「実用、省略、美」こそ、立居振舞の大切な基本である。礼法の基本を実際に稽古することによって日本人の礼の心を学ぶ。	
			対立と対話	現代社会では、様々な人間関係の「対立」を形式的な立場や表面的な優しさで回避しようとするために、DV、児童虐待などの家庭内暴力から、パワハラ、ストーカー、クレーマーに至るまで様々な人間関係の問題や事件が生じている。こうした現象は、学校の中も例外ではない。生徒同士、生徒と教師、教師と親の間でも、「対立」はしても「対話」が成立しないために、いじめ、不登校、校内暴力、モンスターペアレントなどが問題化し、まさに学校は、危機的な状況にあると言える。 この「対立と対話」の授業では、主に「いじめ」問題への問いを通して、学校教育において、生徒、教師、保護者の間で、いかにして真摯な「対話」が可能であるかを、心理学、社会学、道徳教育、宗教教育、臨床教育学、教育的人間学など、様々な分野からアプローチを試み、学際的な視点から考察する。	
			宗教と教育の関係	「アメリカのある学校で、偏見をなくそうと“イスラム教徒になりきってみよう”という授業をやったら、父母から猛反発がきた」 「ある生徒が信仰上の理由から、“卒業式で校歌を歌いたくない”と言い出した。国歌を歌う歌わないの話は聞いたことがあるが、どういうことか。」「こっくりさんが流行っているが、どう指導すべきか。」 こういった具体的事例をもとに、現在、宗教と教育の間にはどのような問題が持ち上がっているか（社会科等の授業でどのように宗教を教えるかだけでなく、課外での指導でも）、踏み込んでよいこと、いけないことは何かを知る。さらに職場での宗教ハラスメント問題なども、今後必要性が増す生涯教育として取り上げる。	
		C群	現代教職論	教育職員免許法施行規則で定められている「教職の意義等に関する科目」である。教師の職務内容は多岐にわたるが、いずれについても教師を見る世間の視線は今日実に厳しいものとなってきている。 授業では、担当者自身の高校教師・校長の経験をふまえつつ、これらの職務内容のいくつかを具体的に紹介・考察することを通して教職に就くことの自覚を促しつつ、これからの時代において教員に求められる資質について考えていきたい。特に、教育人間学専攻では1年次配当科目として、教職科目全体に対する導入科目としての役割も果たしたいと思っている。	
			教育本質論	歴史上現れた様々な教育思想は、時代や文化の制約の中で、〈或る問題をどう認識し、どうアプローチするか〉という議論の定型を提供してくれている。もちろん、そのような制約を忘れて、現在の教育問題解決への処方箋を安易に歴史の中に見出そうとすることは慎まなければならないが、しかし、歴史上の教育諸思想を学ぶことで、現在の教育問題を様々な角度から見る目を鍛えることはできるはずである。本講義の目指すところはまさにここにある。	
			発達・学習論	生涯学習が言われる現代において教育に携わるためには、成人するまで発達しその後衰えるという発達観ではなく、生涯を通して変化していく人間という発達観を持つことが重要である。そこで本講義では、教育心理学の観点から、人間の一生における各段階の特徴について知り、教育との関連を考察する。人間が誕生してから老年に至るまでの流れに沿って、その情動的側面と認知的側面に見られる特徴を概観する。そこから、それぞれの発達段階における教育の意義と可能性を考える。	

第Ⅱ類科目	発展部門	C群	教育制度論	教育職員免許法施行規則で定められている「教育の基礎理論に関する科目」の一つである。教育に関する社会的、制度的又は経営的事項として、教育制度の意義と学校体系、改正教育基本法と学校教育法、初等・中等・高等の各教育段階ごとの教育制度の歴史と現状がかかえる諸問題を社会学的調査の成果も援用しつつ概説し、あわせて学校制度改革の動向をさぐる。後半は、教育行財政制度及び学校経営、学校評価について概説し、まとめとして今後の教育制度全体の改革の原理と動向を探りたい。	
			教育と社会	まず日本における教育と社会の関係を把握し、海外との比較に基づき日本の特徴を理解する。その際に特定の価値観に偏った見方を排し、できる限り客観的で柔軟な視点から教育事象を考察しようとする。その上で現代社会が直面する教育上の諸問題についてその要因や背景、本質を的確に理解することを目指す。	
			教育課程論	教育課程の編成ができるということは、その教師がプロであるための条件の一つであるとも言われる。学校の教育活動の全体計画である教育課程を各学校で編成する際には、どのような問題を考えなければならないのだろうか。本講義では、戦後我が国の学習指導要領の出発と変遷、そして最新の20年版指導要領が告示されるまでの過程を追う中で、その時々にどのような論点が議論されたかを整理してみる。後半では教育課程の全体構造に関わる諸問題を概観するとともに、「総合的な学習の時間」に代表される新しい学びの可能性に言及し、最後に教育課程の編成原理について実践的に考察したい。	
			社会科教育法Ⅰ	社会科教育法Ⅱとともに、社会科教師となるための基本的知識の修得を目的とするが、この社会科教育法Ⅰでは、主として、戦後の我が国における社会科の成立から始めて、新教育の華と言われた初期社会科の理論と実践を紹介しつつ、その後の指導要領の変遷を辿りながら現在の社会科の現状と課題を明らかにする。その上で、中学校社会科の3つの分野（「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」）について、年間の教育課程の在り方及び学習指導の諸形態と評価について講じる予定である。	
			社会科教育法Ⅱ	社会科教育法Ⅰに引き続き、社会科教師となるための基本的知識の修得を目的とするが、この社会科教育法Ⅱでは、主として、年間の指導計画案の作成、1時間分の学習指導案（教案）の作成及び模擬授業実習、授業後の協議会（反省会）に多くの時間を充てる予定である。指導案を書いて模擬授業を行い、批評を受けてまた指導案を書き直してみる。この経験をできるだけ多くしてもらいたい。最後にはこうした経験を元に、これからの社会科の教師像、そして社会科という教科の在り方についても考えてみる。	
			社会・地歴科教育法Ⅰ	中学校社会科及び高等学校地理歴史科の教員免許取得希望者に、教科の成り立ちや教育内容の解説を行う。現代の中等（中・高等学校）社会科の教育内容や方法の変遷・傾向等を、諸外国の例と比較しながら、地理教育・歴史教育を中心に概観していく。その上で教材化や指導形態の諸方法を考えていく。	
			社会・地歴科教育法Ⅱ	新しい学習指導要領に基づき、高等学校地理歴史科の構造と教育内容を解説する。学習指導計画及び学習指導案の作成方法を習得する。グループで指導案をつくり、代表者がその授業を発表するという模擬授業を行い、高等学校での実践的な指導方法についても考えていく。	
			社会・公民科教育法Ⅰ	中学校社会科（公民的分野）の教員免許状取得希望者を対象として、学習指導要領の理解の徹底、及び、受講者全員による模擬授業の実践を通じ、教案作成の指導や教育実践への助言を行う。即ち前半では、学習指導要領社会（公民的分野）の目標・内容・内容の取り扱い・指導計画の作成の各項目について、学生が持参した教科書と突き合せながら記述内容を徹底的に理解する。後半では、受講生全員に模擬授業の機会を与え、指導案作成から他の受講生の模擬授業へのコメントを通して、授業づくり・授業批評（分析）の実習を行ってもらう。最後には、採用試験に向けての心構えについても話す予定である。	

第Ⅱ類科目	発展部門	C群	社会・公民科教育法Ⅱ	春学期の社会・公民科教育法Ⅰに引き続き、高等学校公民科の教員免許状取得希望者を対象として、学習指導要領の把握の徹底、及び受講者全員による模擬授業の実践を通じ、教案作成の指導や教育方法への助言を行う。即ち前半では、公民科の中の各科目（現代社会、倫理、政治経済）ごとに目標・内容・内容の取り扱い・指導計画の作成の各項目について、学生が持参した教科書と突き合せながら記述内容を徹底的に理解する。後半では、受講生全員に模擬授業の機会を与え、指導案作成から他の受講生の模擬授業へのコメントを通して、授業づくり・授業批評（分析）の実習を行ってもらう。最後には、採用試験に向けての心構えについても話す予定である。	
			宗教科教育法Ⅰ	宗教科教員志望者を主な対象とし、日本の宗教教育の歴史と現状について学び、現代における教育の問題点と宗教教育・情操教育の必要性について考察する。また、日本という土壌での宗教教育について、その方向性と方法のための手掛かりを探る。	
			宗教科教育法Ⅱ	宗教科教員志望者を主な対象とする。宗教科教育法Ⅰで学んだ宗教教育の問題点を踏まえて、「宗教科教育」と「宗教教育」との教授概念を比較しつつ、宗教科教育はどうあるべきか、またその実践方法について学ぶことを課題とする。特に本講義では、特定の学校の教育課程を念頭に置き、そこにおける宗教科教育の位置づけを考えることから始め、その上で、宗教科の年間指導計画及び1時間の学習指導案の作成を体験的に学び、できれば受講者全員が模擬授業に挑戦してみたい。こうした授業づくりとともに、他の受講生の批評に学びつつ指導案の改善を図る。これは、授業分析の実習でもある。	
			国際理解教育論	国際理解教育の現状と課題について、異文化理解・異文化適応・多文化共生等にかかわる各地の先進的な実践事例からその基本的な視点を学び、さらに地域のかかえる具体的問題事例にも実践的にかかわることで理解をより一層深めたいと思う。この講義では、国際理解というものを、（1）異文化が生む対立の理解、（2）先進国の途上国理解の欠如からくる問題点などの視点から捉えて考えていく。また国際理解を進める上で有効な開発教育の手法を同時に学び、ファシリテーターとは何かを体験を通して学ぶ。期末には、学生が個人がグループで、実際にワークショップをファシリテーションするか、もしくは国際的課題を選んで、その理解を進めるための必要なこと、課題点などを分析して発表する。	
			道徳教育研究	学校教育における道徳教育について、その歴史と現状を概観するとともに、道徳授業の具体例を類型化しつつ、その理論と実践について検討する。前半部分では文部科学省による道徳教育実態調査の結果からその現状を知ることから始め、現行指導要領における道徳教育の在り方と我が国における道徳教育の歴史を学ぶ。後半部分では、我が国で今日実践されている道徳の授業から「構造化方式」「価値の明確化」「モラルジレンマ授業」等を取り上げてその理論と実践を具体的に検討していく。	
			特別活動研究	昭和22年学習指導要領以降の特別活動の歴史的変遷を通じて、平成10年学習指導要領において示された学級活動、児童生徒会活動、学校行事、（小学校はクラブ活動）の教育的意義を明らかにし、生徒指導、道徳教育との関連して、「なすことによって学ぶ」「ホームルームが中心」「児童生徒の自治的自発的活動」という特別活動の原理、内容について講義する。	
			教育方法論	教科を指導することは、教科書を読み上げるだけではなく、生徒が内容をよりよく理解し深めるための様々な工夫が必要となる。本講義では、参加者が、学習指導（授業）に関する基本的な概念と原則を理解し、教材や授業案・評価方法を考える基礎となる知識とスキルを獲得することを目的とする。授業は3回を1つの単元とし、4つの単元により構成する。各単元では、2回の授業を、講義形式で行ない、テーマに関連する概念と実践研究を紹介する。残り1回の授業は、受講者によるグループワークと発表、議論を行なう。発表や議論を通して、講義内容に関する知識を、自ら活用できるようになることを目指す。	

第Ⅱ類科目	発展部門	C群	生徒・進路指導論	「生徒指導」「進路指導」は多義的に用いられており、歴史的な経緯を踏まえて「生徒指導」「進路指導」を説明できる研究者、指導主事、教師は少ない。また、小学校、中学校、高等学校などの学校種別ごとの違いや理論と実践にも大きな隔たりが見られる。本講義では、歴史的経緯を中心に理論を概観し、さらに最近の生徒指導・進路指導の在り方について学習し、多様な生徒指導・進路指導に対応できる基礎基本的な理論を学習する。	
			教育相談	近年、文部科学省によるスクールカウンセラー事業の推進など、教育分野における心理学の重要性が増している。教師自身はカウンセラーではないが、カウンセラーとの望ましい関係づくりのためにも、カウンセリング、教育相談に関われる基礎知識は必須のものとなっている。この授業では、教育相談の理論背景や歴史的経緯、扱う問題領域など様々な点について、基本から現状に至るまで幅広い視点を身につける。	
			教育・現場体験	近隣の学校や社会教育施設、学童保育の現場等に出向き、そこでの教育（授業）を参観したり、教育活動の補助（TA）など教職員の業務の一部に参加したりしながら教育現場の現実に肌で触れる。そこから教育現場の抱える諸問題を発見し、見聞を広げてもらうことを課題とする。『教育キャリアゼミナール』等への基礎資料を提供するとともに、それらの科目で鍛えた「眼」で現実を見直してほしい。茶髪、ピアス、男子の長髪、必要最低限を超える化粧等は厳禁。受講希望者には面接を行い、合格者のみ履修を認める。	
		D群	生涯学習概論	生涯教育・学習の意味と歴史、生涯教育・学習と社会教育・学校教育とのかかわり、生涯各期の学習ニーズと学習課題、生涯学習支援システム、生涯学習施設と指導者、生涯学習ネットワーク、生涯学習振興行政等について概説する。	
			比較生涯学習概論Ａ	主として、わが国における近代以降の社会教育の系譜と特質、生涯教育の考え方の特質と流れなどを整理することによって、国・時代の相違から生じる多様なタイプを明らかにする。時代対象は、わが国の歴史的特質から江戸期を含めて考察する。内容的には、施設、人物、社会教育関係図書など多くの事項を扱う予定である。	
			比較生涯学習概論Ｂ	主に英国・米国を例にとり日本と異なる生涯学習の発展と現状を整理することによって、歴史と文化の相違から生じる多様な生涯学習のタイプを明らかにする。	
			子育て支援学習	少子高齢化社会、家族形態の変化、情報通信技術の発達等による子育て環境の変化を捉え、子育ての現状を整理する。今後の子育てに必要な学習課題について検討し、それらを支援する家庭教育のあり方について学ぶ。	
			青少年と学習	青少年教育の歴史と現状について整理し、青少年教育の担い手である青少年教育施設や公民館等での奉仕活動・体験活動の推進方策とあわせて、今後の生涯学習社会における青少年教育のあり方を検討する。あわせて、班別の演習・討議、報告会でのプレゼンテーションなど、青少年教育の実践に役立つ技術を学ぶ。	

第Ⅱ類科目	発展部門	D群	成人と学習	この授業では(1)「成人の学び方」の内容・方法をイギリスで開発された「おとなが学ぶときに」の手法を手がかりに理解する。 (2)「成人の学び方」のトピックは、情報通信技術（ＩＣＴ）により、変化し続けている現代社会の学習者をとりまく現代的な諸課題を検討する。 具体的な現代的課題を挙げると、例えば、生命、健康、人権、豊かな人間性、家庭・家族、消費者問題、地域の連帯、まちづくり、交通問題、高齢化社会、男女共同参画型社会、科学技術、情報の活用、知的所有権、国際理解、国際貢献・開発援助、人口・食糧、環境、資源・エネルギー等が考えられる。 (3)学習者をめぐる事象を生涯学習の視点でとらえることを試みる。各種統計資料、新聞・ＴＶの記事、生涯学習関連事業訪問、インターネットサーチなどによる具体的な教材を基に、学生自身の体験も交じえながら、「成人の学び方」の手法を取りいれて、「おとな」が必要とする「学習の課題」について考えていく。	
			教育と宗教	「宗教」と「教育」の基本的理解から、宗教教育の歴史、思想や問題点、さらには宗教における多くのテーマにおける「人間」への深い思慮、特に人間そのものが実に「宗教的人間」という存在であることへの自覚と理解を深める。多くの「人間」テーマを取り上げてみたい。	
			社会教育計画論	住民の学習を支援する生涯学習推進計画の意義、企画・立案の視点と手順の理解と習得を図る。それとともに、生涯学習推進計画の一部である、学習計画（学習プログラム）の企画・立案の視点と手順、学習展開プログラムの企画・立案の手順、学習評価企画・立案の視点と手順などについて理解と習得をすることを目的とする。	
			教育文化事業論	生涯学習が各方面で盛んになっている中で、民間における教育文化事業がどのような状況であるかを理解しておくことは重要である。民間教育文化事業（カルチャーセンター、塾など）の現状や動向を取り上げて、現代社会における生涯学習の状況と課題を考察する。授業は秋学期終了後の集中講義とする。なお、民間教育活動の実態を調査した報告書を提出させる。	
			図書館情報学Ａ	現代図書館の社会における意義と役割・機能について、その歴史的経緯も参考にしながら概要を理解する。その上で日本における図書館の館種、所蔵資料の種類、図書館政策と関係法令、図書館同士の協力体制、図書館と他の情報サービス機関の関連、図書館の動向と課題、図書館関連団体等についてもまなぶ。	
			生涯スポーツ論	日本の生涯スポーツは、社会状況の変化に伴ってその形や目的を変容させている。日本におけるその歴史、諸外国との比較、また2000年に文部科学省が発表した「スポーツ振興基本計画」の現状について考え、新たな生涯スポーツの方向性について講義する。	
			生涯学習施設実習	生涯学習の主要な柱である社会教育施設の歴史、法律的根拠、現状と役割について、施設実習を通じて学ぶ。あわせて、それらの施設で展開される学習プログラムの企画・立案についての知識・技術を学ぶ。	
			スポーツ実習Ａ	本授業は夏期休業期間中に集中形式で行い、硬式テニスの技術向上、ルールなどの理解を目的とする。実技では生涯スポーツのひとつとして将来に実践できるようにすること、それ以外の場面では異なる学年、学部および学科から参加する学生が積極的に協力し助け合うことを目的とする。さらに教員とのふれあい、会話を積極的に行うことで自身のコミュニケーション能力向上を図る。	

第Ⅱ類科目	発展部門	D群	スポーツ実習B	本授業は夏期休業期間中に集中形式で行う。山や湖に隣接する自然豊かな福島県小野川湖畔の野外活動センターを活動の中心とし、最新の教育キャンプを体験すること、またその空間や時間を有意義かつ創造的なものとすることを目的とする。種々のアクティビティやプログラムにチャレンジして新たな自分を発見し、また新しい仲間とのコミュニケーションを積極的に図ってもらいたい。	
			スポーツ実習C	本授業は冬期休業期間中に集中形式で行う。雪山の大自然を体験し、また雪に親しむことにより、自然環境に対する知識や意識を高める。またスキー・スノーボードの技術を習得し、運動による楽しさや達成感を獲得する。身体活動量が減少しがちな冬期間に行う運動種目の一つとして活用できるようにする。	
	専門ゼミナール部門		教育人間学専門ゼミナールⅠ	専門ゼミナールは、1年次の基礎ゼミナール、2年次の教育キャリアゼミナール他2年次までの学修をもとに、ゼミごとに取り組む問題を設定し、参加する学生が自ら資料を収集、分析、整理し、グループでの討論などを通じて学びを進める必修科目である。この専門ゼミナールⅠ～Ⅳを通じて学びを深め、その成果を卒業論文、卒業制作につなげてもらいたい。	
			教育人間学専門ゼミナールⅡ	専門ゼミナールは、1年次の基礎ゼミナール、2年次の教育キャリアゼミナール他2年次までの学修をもとに、ゼミごとに取り組む問題を設定し、参加する学生が自ら資料を収集、分析、整理し、グループでの討論などを通じて学びを進める必修科目である。この専門ゼミナールⅠ～Ⅳを通じて学びを深め、その成果を卒業論文、卒業制作につなげてもらいたい。	
			教育人間学専門ゼミナールⅢ	専門ゼミナールは、1年次の基礎ゼミナール、2年次の教育キャリアゼミナール他2年次までの学修をもとに、ゼミごとに取り組む問題を設定し、参加する学生が自ら資料を収集、分析、整理し、グループでの討論などを通じて学びを進める必修科目である。この専門ゼミナールⅠ～Ⅳを通じて学びを深め、その成果を卒業論文、卒業制作につなげてもらいたい。	
			教育人間学専門ゼミナールⅣ	専門ゼミナールは、1年次の基礎ゼミナール、2年次の教育キャリアゼミナール他2年次までの学修をもとに、ゼミごとに取り組む問題を設定し、参加する学生が自ら資料を収集、分析、整理し、グループでの討論などを通じて学びを進める必修科目である。この専門ゼミナールⅠ～Ⅳを通じて学びを深め、その成果を卒業論文、卒業制作につなげてもらいたい。	
			教育人間学特別研究	この授業では、教員採用試験の主に教職教養対策を行う。試験合格のためには、「自ら」手を動かして知識を整理し、「自ら」頭で考え、問題を解くという、能動的な学習が、近道となる。 本授業では、そのための学習方法を助言しつつ、事前の予習、授業内での講義、問題演習（授業での中心）によって、試験対策をサポートしていく。周囲に刺激をもらいながら、能動的に学んでいく機会として活用してもらいたい。	
	教職関連部門		日本史概説A	中学校社会科、高等学校地歴科の教員免許状取得を目指す学生が、日本史の一般的な通史的理解を含めるとともに、多角的な視野から歴史を考える力を養う。	
			日本史概説B	中学校社会科、高等学校地理歴史科の教員として授業を行うために、日本史の通史的理解を深める。とくに中世について詳しい講義を行う。その中から日本史の多角的な見方などを学ぶ。	

第Ⅱ類科目	教職関連部門	西洋史概説	2004年に拡大ＥＵが発足し、ヨーロッパは経済・政治・文化各面にわたる新たな共同体を形成するようになった。だが反面で、現在のヨーロッパは多様な諸民族の複合体でもある。それゆえヨーロッパを深く知るには、その普遍性と諸民族固有の特徴の両面をおさえておく事が欠かせない。この講義では、ヨーロッパの東西の要に位置するポーランドの歴史を縦軸に据え、同年代のヨーロッパの全般的状況を比較の対象としながら、「ヨーロッパとは何か」という問題を考えてみたい。	
		東洋史概説	東洋史、なかでも中国の歴史は、人類社会の発展において重要な問題を内在している。わが国を含む東アジア世界にあっても、政治制度・文化成熟に関して中国の果たした役割は大きい。特に原中国ともいえる中国古代そして中世の社会が生み出した要素には大切な意義がある。本講義では政治史を中心に支配構造について考察することにより、中国古代・中世の社会を理解する。	
		人文地理学Ａ	従来のわが国の社会科学では「文化」に対する認識が薄く、異なる文化間の接触・衝突についての研究は立ち遅れていた。異文化理解が、自己をものさしとした「相対化」によって行われるとすると、異文化に対する認識の薄さは、「自文化」に関する認識の薄さをも引き起こしはしないだろうか。本講義では、最近の文化地理学の成果を踏まえながら、「自文化」・「異文化」に対する認識を深め、日本や世界の諸地域の文化が、国際関係や文化景観に大きな影響を及ぼしてきた実態を考えることにする。	
		人文地理学Ｂ	地理学は地表面の諸事象を空間的な位置関係・拡がりから研究する学問であるが、その対象となる現象は様々である。いくつかの人文地理的事例をあげて、環境との関連性の中で人文地理学的な考えを学習する。	
		自然地理学Ａ	地球を取り巻く大気圏の現象を自然地理学的（気候学：科学的な基礎としての気象学的見方も含む）に捉え、大気環境と人間生活の関わりを考える。第一に気候学的な基礎を学習する。次に、例えば気候変化・変動と文明などから“気候の人間生活への影響”について考察する。さらに、地球的規模の環境問題とも関わる“人間の気候への影響”についても考えていく。	
		自然地理学Ｂ	地球表面の形態＜地形＞はどのように形成されてきたか、その成因を考察することによって、環境要素としての地形の性質を理解することを中心のテーマとする。さらに、身近な自然を観察することによって、地形が他の自然の構成要素（植生や水、土壌）とともに、人間生活にどのように関わっているかについて追求する。中・高の地理教科書も取り上げながら考えていく。	
		地誌学	中学校・高等学校の社会科や地歴科の地理には、地誌的な内容が多く含まれており、特にその調査方法が重要視されるようになってきた。外国地誌を中心に、そのテーマと調査方法について、つまり地域を地理学的に研究していく地誌的な見方を扱っていく。アジア、アメリカ、ヨーロッパから例となる国を教科書の中から選び、考察していく。	
		法律学概論 （国際法を含む）	わが国の現行法制度の全体像を概観する。指定テキストである『法の世界へ（第4版補訂）』を用い、契約、所有、損害賠償、雇用、家族、そして紛争解決制度など主に民間人同士の法律関係や紛争解決のあり方を検討し、近現代の法制度とわが国の現行法制の概要を学ぶ。	
		政治学概論 （国際政治を含む）	政治現象を理解するためには、複眼的思考が求められる。すなわち、実在政治の冷徹な認識と、望ましい政治を模索する意思とが必要である。本講義は、まず政治をめぐる基本的な思想、制度、理論モデル等について理解することを目的とする。さらに、日々報道される政治現象から具体例を選んで考察することを通して、わが国の政治と国際政治の現状を理解する基礎的な力を養うことを目指す。	

第Ⅱ類科目	教職関連部門	経済学概論 （国際経済を含む）	経済問題は国民一人ひとりの暮らしに直結するものでありながら、それを正しく理解するツールである経済学の方法をきちんと身につけている人は意外に少ない。この講義の前半では、現実経済の正確な理解を主眼として、マクロ・ミクロの経済理論と近年重要性を増しているゲーム理論について、その基本を学ぶ。次いで後半では、財政、金融、国際経済など、経済理論の応用分野について概説する。	
		現代宗教論	アメリカの価値観やライフスタイルはもちろんのこと、政治・軍事といったハードな側面も、理解を深めるには「宗教」が鍵である。多様なアメリカの宗教現象を比較し整理する工夫として、この授業では「政教分離」に注目する。「世界の縮図」と言われるアメリカの宗教情勢を読み解き、発生中の諸問題について考えることは、自分を将来待ち受けているものをいち早く知り、対応を考えるシミュレーション訓練になる。	
		宗教史Ⅰ	日本の宗教史をどのように捉えるかという基本的な視点を明らかにした上で、日本の歴史上に果たした宗教の役割を幅広く学ぶ。歴史的事実の正確な把握を心がける。あわせて現代日本人の思想や生活の中における、様々な宗教の影響を考える。	
		宗教史Ⅱ	宗教はそもそも何がきっかけで始まったのか、考えたことはあるか。この授業では、宗教の歴史を、その起源から現代まで、世界規模で大づかみにとらえていく。またその際、宗教に対する″フェア″な視点とはどういうものかを意識する。宗教の歴史にも解釈論争があるからである。たとえば聖書の中には物語的部分が多く含まれるが、それらは世界各地の神話・伝説と同じようなものなのか、根本的に違うものなのかは熱く議論されてきた。そのような問題を知ることで、宗教の見方が変わる。	
		卒業論文	3～4年次を通じた専門ゼミナールⅠ～Ⅳにおいて、担当教員が指導する。 3年次においては、卒業論文のテーマ設定と作成のための資料収集、論文の章立てと各章の概略を明確にする。 4年次においては、各人のテーマを深め、資料の収集・読み込み、章ごとの概略の作成等を通じて、卒業論文として具体化する作業をし、卒業論文を完成させる。	
		卒業研究	3～4年次を通じた専門ゼミナールⅠ～Ⅳにおいて、担当教員が指導する。 3年次においては、卒業研究の専門的課題のテーマ設定と関連する資料の収集の方法を学びながら、テーマの概略を明確にし、各自が問題意識をもって調査、考察する。 4年次においては、各人の研究課題を深め、資料の収集・読み込み、調査、考察等を通じて、卒業研究として具体化する作業をし、卒業研究を完成させる。	

（注）

1　開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。